

フレーベル教育思想におけるドイツ・ロマン主義の影響に関する一考察

- フレーベルとノヴァーリスとの関連を中心に -

指導教官：森川 直

岡山大学大学院教育学研究科 学校教育専攻 14-007 原 安利

## 1. 研究の目的

O.F.ボルノウによれば、「どのような教育学においてもある一定のロマン主義的な精神は欠くことのできないもの」<sup>1</sup>であり、もしも、「ロマン主義的な精神」を欠くならば、教育学ならびに教育実践は「合理的に規定しつくされた生活という殺風景な味気なさの中に沈み込ん」でしまうことになる。すなわち、何もかもがマニュアル化されてしまい、教師は「教える人」、子どもは「教わる人」としての標準動作を押し付けるだけの、空虚な理論・実践が生まれてくる事になる。そのようなマニュアル化した教育実践によって、豊かな人間形成が行われるものだろうか。

ロマン主義に立脚した教育者として名高いフレーベル(1782-1852)の思想を見直すことは、教育の「殺風景な味気なさ」から、ボルノウの言うところの「教育の失われる事のない目標」を掘り起こし、生き生きとした教育を実現するために必要な事である。

フレーベルがロマン主義に立脚した教育学者であるという見解は、ボルノウはもちろんの事、シュプランガー、荘司雅子、岸信行といった有数の研究者達によって立証されてきた。

シュプランガーは、「母性や愛情、生命の合一への憧れ」にフレーベルのロマン主義の根源を見出し<sup>2</sup>、荘司は、フレーベルが1799年に「ドイツ浪漫主義の揺籠でもあればその中心地でもあった」<sup>3</sup>イェナ大学に入学したという事実を踏まえて「フレーベルの世界観と人生観には、夢とドイツ・ロマンティークが一貫して流れている」<sup>4</sup>とした。岸は、荘司の見解により説得力を持たせるべく、当時イェナで活躍していた哲学者シェリング<sup>5</sup>と詩人ノヴァーリス(Novalis 1772-1801)とフレーベルの思想的交渉を考察した。<sup>6</sup>

倉岡正雄は、フレーベルの思想のロマン主義を前提とする見方に首肯しながらも、フレーベルの思想の「形而上学に見られる合理主義」を暴き出し、これを「従来の啓蒙主義が求めていた合理主義を包越したものである」と位置づけ、フレーベルの教育思想が啓蒙主義・主知主義を超えたロマン主義の立場に立つことを立証した。<sup>7</sup>

前述ボルノウは、教育学や教育実践において「ロマン主義的な精神」が必要であると説き、フレーベルにおいてその「ロマン主義的な精神」を見ようとしている。「ロマン主義的な精神」を十分に持っていると言われるフレーベルは、ボルノウにとって「殺風景で味気な」くなりがちで教育学の救世主的な存在だといえる。これまでの先行研究は、教育学の救世主フレーベルの救世主たる所以やその有用性を探るべく、フレーベルがロマン主義者であ

るといふ内実について様々なアプローチが試みられ、それぞれにそれなりの成果を得る事が出来たが、特にボルノウがロマン主義者の代表者として示した文学者ノヴァーリスと、同じくボルノウがロマン主義の教育者として指名したフレーベルの思想的交渉に関しては、未だ論じる余地が残されている。

ボルノウは、教育学には「ロマン主義的な精神」が必要であることを力説したが、この「ロマン主義的な精神」が何であるのか、そして教育と「ロマン主義的な精神」が如何に結びつくのかに明快な答えを与えていない。

本論文は、教育学者フレーベルが文学者ノヴァーリスから受けた影響を明らかにすることで、教育思想と「ロマン主義的な精神」がどのような結びつきを得るのかを考察する事を目的とする。

## 2.論文構成

はじめに

第一章 19世紀初頭のドイツにおけるロマン主義の背景とその性質

第一節 ドイツにおけるロマン主義の歴史的背景

第二節 ロマン主義の特質

第二章 フレーベルの『人間の教育』におけるロマン主義的側面

第一節 フレーベルが『人間の教育』を著した背景

第二節 『人間の教育』の解釈

第三章 フレーベルとノヴァーリスの思想交渉

第一節 ノヴァーリス略伝

第二節 ノヴァーリスのロマン主義者たる所以

第三節 フレーベルの『人間の教育』にみるノヴァーリスの影響

おわりに

## 3.論文の概要

第一章 19世紀初頭のドイツにおけるロマン主義の背景とその性質

フレーベルは一般的にロマン主義の影響の濃い教育学者と位置づけられる。

しかし、フレーベルが影響を受けたとされるロマン主義が如何なるものなのかを知らなければ、かかる位置づけも意味を成さない。この章では、フレーベル理解の前提となるロマン主義が如何なるものなのかを論じる。

第一節 ドイツにおけるロマン主義の歴史的背景

ボルノウによれば、フレーベルが影響を受けたロマン主義は、「十八世紀の末頃にドイツの文学において成立し、やがて当時の哲学やさまざまな科学へも広がり、いくつかの局面を経て十九世紀の中頃まで続いて、やがて現実主義的な諸潮流に取って代わられた一つの精神運動」と説明される。ロマン主義が成立した 18 世紀末から 19 世紀にかけてのドイツはどのような状況だったのだろうか。

沼田裕之によれば「先進国のイギリスやフランスに比べての産業革命の立ち遅れ、領邦諸国家の並存、そして何よりも、ナポレオン戦争における敗戦という、国家としての悲哀を嘗め尽くしていた」<sup>8</sup>と表現されており、政情不安定な後進国としての地位に甘んじていた事が伺える。沼田の指摘した「国家としての悲哀」から立ち直るために、ドイツ（プロイセン）は、「シュタイン・ハルデンベルクの改革によって、封建的社会機構を資本主義社会に順応させるための一連の処置をとり、国力の回復と民族的自覚の高揚につとめた。」<sup>9</sup>

シュタイン・ハルデンベルクの改革は、行政の側からの「国家としての悲哀」の処理であったが、ドイツの民族的自覚の高揚を支えたのが、フィヒテ<sup>10</sup>を筆頭とする哲学者たちであった。

フィヒテの業績として特筆すべきは、1807 年からその翌年にかけて行われた『ドイツ国民に告ぐ』といわれる講演であろう。この連続講演の冒頭でフィヒテは「私がこの講演において前提とする独逸人聴衆諸君は、おそらくその全身をあげて被害による苦痛の感情にうちひしがれてしまい、この苦痛を快とし、この諦めがたき悲嘆に満足し、この感情の為に、諸君に発せられる実行の要求に何らなすところなく、我慢していようとする如き人々では、決してない。否、私の前提たる独逸人聴衆諸君は、自らこの当然の苦痛をのり越えて、透徹せる思慮と省察とに至り得たる、もしくは少なくとも至り得る能力のある人々でなければならぬ。」<sup>11</sup>と、当時の「国家としての悲哀」に打ちひしがれたドイツ人に喝を入れ、ドイツ人の誇りと自覚を促している。

19 世紀のドイツは、諸外国から社会経済面で大きな遅れをとったものの、「だからこそその精神文化の領域での偉大な思考実験の数々」<sup>12</sup>によって、独自のロマン主義の花を開かせたのであった。

## 第二節 ロマン主義の特質

西村皓によれば「18 世紀の啓蒙主義・主知主義<sup>13</sup>の思想に反抗してドイツ・ロマン主義の哲学や文学が勃興した」<sup>14</sup>とあり、「18 世紀の啓蒙主義・主知主義の思想に反抗」するロマン主義の構図を作り出している。また、西村はガダマーの「啓蒙主義の逆転たるロマン主義」「いまや啓蒙主義に対する批判はいずれもロマン主義による啓蒙主義の裏返しという道を進む」という表現を引用<sup>15</sup>して、ロマン主義と啓蒙主義の対立の構図を強調している。

この啓蒙・主知主義の思想に反抗する姿勢については、シェンク（1912-）も「合理主義

への反動」として捉え、ロマン主義なるものの一傾向として大いに首肯しているところである。

小笠原は、ロマン主義についてブランケナーゲルやヴァルター・リンデンの主張を援用して「非合理的な諸力と合理的な諸力とのより高い統合として、それら両者を結び付けようとした点で、一方において、詩的に創造的であるよりはむしろ哲学的に批判的傾向を有しており、他方、ロマン主義は、感覚を超越した世界、夢や憧憬、無意識の世界や秘密の世界を〔判断力や思考過程よりは〕寧ろ直感的に感じ取る領域へ、より繊細に、より深く潜入して」<sup>16</sup>いくという、2つの相矛盾する傾向を内包する特徴があるとしている。

荘司雅子の見解では、ロマン主義は、「ロマン主義の運動は周知のように、世界と神との関係を時計と時計師との関係のように全てを合理的機械的に考える啓蒙主義に対して、悟性ではなく感情が一切であるとし、生は秩序ではなくて創造であるという見地から展開してきた」<sup>17</sup>としており、西村やシェンクの啓蒙主義との対立構造に準拠しているようだが、荘司が「古典的人間とロマン的人間」において示した、ロマン主義の系譜を紐解くと、ロマン主義が単純に啓蒙主義と対立するような構図になっていないこと<sup>18</sup>がわかる。むしろ、啓蒙主義の重視した理性を積極的に取り入れ、その上で、理性では語りえぬものへの憧憬を示したのが、荘司の解釈に基づくロマン主義である。

ロマン主義は、啓蒙主義への強い反動（荘司によれば「シュトゥルム・ウント・ドランク(Sturm und Drang)」を端緒とする活動）によって生み出された精神活動である。荘司によれば、この反動によって「古典主義（荘司は「クラシック」という言葉も交えている）」が生まれ、その後に「ロマン主義」へと発展していったとされる。この「古典主義」と「ロマン主義」は、「およそ文化活動の行われるところには、必ず精神的活動が行われている。さらに精神的活動が行われているところには必ず永遠なるものであるイデーが働いている。しかも、この永遠なるもの『イデー』は人間が思慕し、あこがれ追及すればこそ働くものである。」という考え方、すなわち「永遠なるもの」の存在を認めるという点で共通性が見出されるが、この「永遠なるもの」を何に見出そうとしたのかという点で亀裂が生じる。

「古典主義」は、この「永遠なるもの」を人間という枠の中に見出し、それで充足してしまうのに対し、「ロマン主義」は、「手で握れるものに我々の生命を基礎付けることは人間であること(Menschentum)の最高の力を否定することになるから、まさに永遠の境に迷い込もう」という立場をとった。しかし、ただ「永遠の境」に迷い込むだけであれば、「シュトゥルム・ウント・ドゥランク」と全く変わらない。「ロマン主義」の人々は、現実を超えた無限なるものを求めるという「形而上学的要求」を持っており、この要求を持つという点において「シュトゥルム・ウント・ドゥランク」と共通性を持つが、「その要求が理性から発していることを認識していたのは、ロマンティークの人々である。」とし、啓蒙主義者として知られるカントの哲学の関与が少なくなかったことも荘司は指摘している。

「啓蒙主義」と相對する「シュトゥルム・ウント・ドゥランク」の後継として現れた「ロマン主義」は、現実を超えた無限なるものを求めるという点において、あらゆる物事を理

性の法則で説明しようとする「啓蒙主義」に抵抗する。しかし、「ロマン主義」は、「シュトウム・ウント・ドゥランク」が軽侮した理性を、決して軽んじたわけではなく、寧ろ理性の法則という「啓蒙主義」の視点を取り込み、むしろそれを足がかりにしながら「シュトウム・ウント・ドゥランク」が求めた「無限なるもの」により接近しようとした点において、「啓蒙主義」と「シュトウム・ウント・ドゥランク」の二者の争いを乗り越えようとしたのである。

## 第二章 フレーベルの『人間の教育』におけるロマン主義的側面

この章は、フレーベルが『人間の教育』を著すに至った道程と、その書の解釈を通して、フレーベルがドイツ・ロマン主義の影響下に位置づけられるのが正当だという裏づけを得る事を目的とする。

### 第一節 フレーベルが人間の教育を著した背景

フレーベルは 1816 年 11 月 13 日にチューリンゲンのグリースハイムに「一般ドイツ教育施設」なるものを創設し、翌年にはカイルハウにこの教育施設を移転させている。これが世に言う「カイルハウ学園」<sup>19</sup>で、1818 年に 10 人しかいなかった学園の生徒が 1823 年には 40 人にまで増加し、なかなか評判の高い学園だったことが伺われる。

しかし、「カイルハウ学園」は、1826 年の生徒数 60 人以上をピークに、次第に人気を失っていく。この原因には、フレーベルの提唱する教育法が一般に認知されないまま、自由主義・社会主義の疑いをもたれたこと、学園スタッフにバーロップ（急進派として政府当局から目をつけられていた）がいたため、「扇動者の巣」という風評を流された事が影響している。

こうした「カイルハウ学園」存亡の危機の中で、1826 年に、フレーベルは『人間の教育』を著したが、荘司によれば、この書は「カイルハウ学園の教育内容の叙述であり、騒々しい世間に対する偉大な弁明書でもあり、同時に、当時のフレーベルの教育学のおよび哲学的見解の一大集成」<sup>20</sup>としての意味を持つものである。

しかし、1827 年には、「カイルハウ学園」の生徒は 6 人にまで減少し、フレーベル自身は、1830 年に「カイルハウ学園」から手を引いてしまう。フレーベルの『人間の教育』は、あまりに難解で、「騒々しい世間に対する偉大な弁明書」としての役目を十分に果たす事が出来なかったということであろう。

フレーベルは、カイルハウ学園をつくり、『人間の教育』を書き上げるまでに、フィヒテやシェリングといったドイツ・ロマン主義の哲学者達の思想を目の当たりにし、ノヴァーリスやアルントといったロマン主義の文学者たちの作品を読み、さらにヴァイスに代表さ

れるような自然科学に対する深い見識を自分のものとしている。さらに自分の私生活における様々な経験や、そこから得られた思索を混ぜ合わせながら、フレーベルは自分の教育思想を練り上げていった。

フレーベルは、イエナ大学、ゲッティンゲン大学、ベルリン大学において、言語学と自然科学に傾倒し、そこに専心する事で、万物に宿る法則を見出そうとつとめた。すなわち世界を合理的に把握しようと努めた面がある。一方、ホルツバウゼン家でルソーの『エミール』に似せた未熟な教育実践を展開し、子どもとともに花園を作る中で、「人間の生命の教育は、自然の生命の教育と結合していることを悟った」<sup>21</sup>のであった。この人間と自然を結合させるものは何であるかに思いをめぐらせ、そこに「神」という宗教的な存在を見いだした。目に見える自然の事物や子どもを誠実に見つめ、そこに見えざる「神」という存在を見出したフレーベルは、現実を直視しつつも現実を超えた無限なるものを求めるという点において、ロマン主義者というに相応しい。

## 第二節 『人間の教育』の解釈

『人間の教育』について、荘司は「フレーベルの自然観・象徴主義あるいは事物に対する美的見解はこれをシェリングおよびオーケンの二者に負い、人格・意志あるいは倫理的人生観に関する思想はこれをフィヒテに承け、彼の思想の根底を流れる宗教観を専らクラウゼに仰いだというべきであろう」<sup>22</sup>といている。

ここに示されたフィヒテ、シェリング、オーケン、クラウゼといった哲学者は、それぞれに師弟関係またはそれに準ずる関係を結んでおり、ドイツ・ロマン主義を色濃く彩る思想家達とフレーベルは交友を持っていたことがうかがい知ることができる。

自然を、従来の硬直した「物自体」から「生成する理性」という動きのあるものへと変貌させたシェリングの唱えた「同一哲学」は、自然と精神の根底に絶対者において、多様な自然や精神の在り様も、全て根源は絶対者に帰するものとする思想であるが、このシェリングの視点は、フレーベルの「自然界の多様からその最高原理たる神の唯一なることが推論され、神の唯一であることから自然現象の永遠に発展する多様性が論結されなければならない。」という真理と深く結びついている。ただ、シェリングがこの絶対者の正体を「美」としたのに対し、フレーベルは「神」に置き換えて解釈している。

オーケン<sup>23</sup>については、荘司によれば「フレーベルがいつ頃からオーケンの『自然哲学教科書』を研究し始めたのかは明らかではないが、しかし彼が 1816 年以後オーケンの自然哲学の研究に没頭していたこと、およびオーケンと親交のあったことは確かである。」<sup>24</sup>としており、フレーベルが示した、自然事物が外界から何の妨げも受けないときには「球」の形をとるという見解は、オーケンが示した見解<sup>25</sup>を援用したものであることを、荘司は示唆している。

荘司は、フィヒテのフレーベルに与えた影響について、フィヒテの言葉「私は私の欲す

るところのものをなしうる。人間においては「何一つ不可能な事はない」と、フレーベルが 23 段落目に書き残した言葉「神は自分自身の模像として、自分の肖像として、人間を作られたのであるから、人間も神と同様に創造し、作用すべきである」というくだりに、「人間の自己神化の雄渾な精神の律動をも感知する」<sup>26</sup>ことができるとしている。

クラウゼ<sup>27</sup>は、「万有内在神論」の創始者として知られる哲学者であり、フレーベルが自伝においてクラウゼとの書簡を開示するほどの友好関係を持っていた人物である。

彼の唱えた「万有内在神論」とは、荘司が引き合いに出すクラウゼの著書『人類の原像』によれば、「万物は神の中に、また神によって存在する。唯一の神をほかにして何者も神ではない。ただ紙自らが永遠に創造したもの、それは神そのものの中に自らの像として不滅に作られたものである。世界は神の外にあるのではない。神は存在するもののすべてである。世界は同じくまた神そのものではない。神の中に神によってあるものなのである。」<sup>28</sup>「全地球の有機的自然界は分割できない唯一の有機体あるいは一個の大きな身体としての意味を現している。」<sup>29</sup>人間はただ精神だけでもなければ身体だけでもなく、またこれら両者の並立関係とのみ考えられるものでもない。それは神によって身体と精神とから形造られた新たな一個の生命体であり、また自然と理性との生命を一個の共通的なものとして発展させ、この生命を全ての統一された精神的生活力の調和的な相互作用によって共同事業の中に表現するという天職を持ったものである。<sup>28</sup>とされる。スピノザやライプニッツが唱えた汎神論では、神と自然は同一のものとされるが、クラウゼにおいては、神は自然のありとあらゆるものの内面に存在しつつ、万物を超越した存在としてとらえられる。

フレーベルは、冒頭の総論において、自然（外界）・精神（内界）・生命（外界と内界の結合）のどれにも、一つの永久不滅の法則が存在することを前提とし、その前提の根底には「あまねく万物に通じ、自ら明瞭な、生きた、自覚的な、したがって永久に存在する統一者が必然的に存在する」としている。この統一者を、フレーベルは「神」ないし「神性」と呼んでいる。フレーベルは、クラウゼの神の概念を、より科学的な形に作り変え、人間を含めた自然の全てのものに内在し、超越的に支配する法則体になっている。しかし、全くクラウゼと同一ではないものの、フレーベル流の世界理解は、クラウゼなしには成立し得なかったものであるということは、否定できない。

### 第三章 フレーベルとノヴァーリスの思想交渉

荘司は『人間の教育』について、「ある時は思弁によるドイツ・ロマンティックの哲学の道歩み、またある時はファンタジーによって文芸上のロマン主義の道歩みをしている。前者は主として『人間教育』(Menschenerziehung, 1826) に現われ、後者は主として『母の歌と愛撫の歌』に現れている。おそらくその取り扱う対象界の性質によって彼は右の両者のいずれか一方を選んだのだろう。」<sup>29</sup>といい、ロマン主義の哲学への傾倒を示す。

シュプランガーは、ヴァイスの元での鉱物学・結晶学の勉学の成果を『人間の教育』の

中に求め、あまり文芸上のロマン主義の影響を強調しようとしな

ここでは、従来さほど重んじられてこなかった文芸上のロマン主義との思想交渉について論及してみたい。なお、文芸上のロマン主義の代表者として、ボルノウに従ってノヴァーリスを指名する。

### 第一節 ノヴァーリス略伝

(省略)

### 第二節 ノヴァーリスのロマン主義者たる所以

ノヴァーリスは、『ザイスの学徒』の中で、自然の万物の内面と人間の内面の関係を論じるに当たって、「長いあいだ探し回る必要はない。簡単な比較、砂の上に引かれた三四本の線が、われわれをして頷かしめるに十分なのだ。」と、理性では考え得ない、非合理的な思考形式を学徒の一人に語らせ、他方、「世界の意義は理性にあり、理性のためにこそ世界は存在する。」と、あからさまな理性尊重の発言を「真面目な男」にさせる。この学徒と「真面目な男」の議論について、ノヴァーリスはどちらが正しいといった裁定は下さず、この両者の対立の上に「平和の精霊」なるものを漂いさせている。

啓蒙主義の重視した理性を積極的に取り入れ、その上で、理性では語りえぬものへの憧憬を示すのがドイツ・ロマン主義であるのであれば、ノヴァーリスが『ザイスの学徒』で示した態度は、理性的なものと、理性では語りえぬ非合理的なものを並立させており、ドイツ・ロマン主義の特徴をよく現しているといえる。

理性と非合理的なものは、ノヴァーリスの『夜の賛歌』においては、光と夜に象徴される。

光については「この光の遍照こそは、うつし世の国々の摩訶壯麗を啓示するなれ。」と、光が世の中の事物の多様性を明瞭に映し出されるものとして、重要なものとノヴァーリスは見ているが、一方で「夜の、我等が裡に開き給いし無限なる眼こそ、神々しく思われるなれ。」と、非合理的で無限な夜の世界への憧れを強く打ち出す。これは荘司のいう、「見えるものにおいてまだ見えないものをあこがれ。探求していく」<sup>30</sup>というドイツ・ロマン主義の特徴をはっきりと示すものである。

### 第三節 フレーベルの『人間の教育』にみるノヴァーリスの影響

フレーベルは、自伝に示すように、ティークが編纂したノヴァーリス全集を読んで感動<sup>31</sup>しており、フレーベルとノヴァーリスの思想的交渉が全くなかったとはもはや言えない。

岸は、ノヴァーリスの世界観は「より純粋な世界は可視的な外的世界にあるのではなく、我々の内部に既に存在している」<sup>32</sup>とし、ノヴァーリスの『青い花』に登場する鉱夫を「自



然の隠された基底部へと突き進み、そこで人間の生そのものにとっても重大な意義を存する努力の象徴的具現」と見做して、洞窟に入るのを好むというフレーベルが記した子供の活動と重ね合わせている。しかし、このフレーベルが記した子どもの活動の一部にノヴァーリスの影響を収斂してしまうと、フレーベルにおけるノヴァーリスの影響は、『人間の教育』においてあまりに貧相なことになる。岸の見解は、あくまでフレーベルとノヴァーリスの関係の一断面である。

ノヴァーリスは、『マリア賛歌』において、

「子どもだけが御身を眺め、御身の守護にたよることを許し給わるなら、  
年齢の束縛から、解き放ってください！  
子どもの愛、子どもの誠は  
あの黄金時代から私に備わっているのです。」<sup>33</sup>

といい、さらに『断片』において、

「55. 幼児の集えるところ、そこに一つの黄金時代がある。」  
「56. 幼年時代は成人期に対比している 花と実、春と秋。」  
「58. 教養の全ての段階は、幼児の性より始まる。それ故に、最も多く教養ある、世間の人が、幼児に非常によく似ている。」<sup>34</sup>  
「62. 心緒の静観と静けさの必要。教育学の研究 幼児は、まだ、知られざる土地である」<sup>35</sup>

と、彼自身の子ども観を明らかにする。

ノヴァーリスは、フレーベルほど厳密ではないにせよ、56 番の断片で子ども時代の発達連続的で、後続の時期に影響を及ぼす事を示し、55 番や 58 番の断片および『マリア賛歌』の一節において、子どもの活動ならびに子どもの存在に、我々が失いつつある大事なものがあることを示す。そして、62 番の断片において、教育学に幼児期の研究を行うよう求めているのである。

フレーベルは、ノヴァーリスが子どもに期待した「黄金時代」を当時の哲学や自然科学を様々に駆使して明らかにし、大人が子どもから学ぶことの大きいことを指摘することに成功した。

ノヴァーリスが心を痛めたのは、その一つに社会にはびこる悪の問題がある。

ノヴァーリスは『青い花』のなかで、ハインリヒと医師ジルヴェスター翁の議論を通して、社会にはびこる悪が何によって生じ、どうすればそれを克服できるかを論じる。

ジルヴェスター翁にいわせれば、「道徳的な感受性の乏しさと自由の欠如」が全ての悪の根源であり、「良心の力」がその特効薬となるのである。

フレーベルは、社会にはびこる悪の根源を「虚偽」すなわち「本質が消滅しているもの」の仕業とする。「神」の存在を否定し、冒瀆することで、本来あるべき「神」が消滅して「虚偽」が生まれる。この「虚偽」の中では、「神」も冒瀆されるわけだから、宗教心の涵養もできない。ジルヴェスター翁のいう「道徳的な感受性の乏しさと自由の欠如」は、フレーベルの言う「虚偽」である。

フレーベルは、こうした「虚偽」を芽生えさせぬ為に、乳児期の頃から「共同感情」によって自分と神の関係を予感的に認識させるようにし、少年期・生徒としての時期において、学校という場で「神」と自然と自分との関係を明瞭に認識させるように考えた。フレーベルは、人間に本質的に存在する「神性」を目覚めさせ、その「神性」に基づいた生活を行うことを健全な生活と見做したのであり、ノヴァーリスが「良心の力」と名付けたものは、フレーベルの「神性」であったということがわかる。

おわりに

『人間の教育』について、従来荘司が示すように、ドイツ・ロマン主義の哲学者や自然科学者の影響という側面から考察されてきており、フレーベルが読んだであろうドイツ・ロマン主義の文学者の諸作との関わりは充分語られてこなかった。

しかし、「ロマン主義の精神」は、思弁的な哲学の側面と、ファンタジーによる文芸の側面が不離不足のかたちで存在するものであり、都合よく一方を切り離せるものではないはずである。

ノヴァーリスは、人間に本来備わっている「良心」(フレーベルならば「神性」と呼ぶべきもの)を再び人間に宿らせることで、生命の活気を取り戻そうとした。

フレーベルは、子ども時代の人間に生命の本源たる「神性」(ノヴァーリスならば「良心」と呼んだであろうもの)を見出し、生命の貧弱になってしまった大人たちに「父たる人々よ、両親たる人々よ、私達は子供達によって自分の欠陥を補うべきである。私達は子供達によって自分の欠陥を補うべきである。私達はすでに児童生活の生きた創造的な力を失っているから、これを再び子供達から私達の生命の中へ取り込まなければならない。」と呼びかける。

フレーベルとノヴァーリスは、その表現方法こそ違えども、生命の本源に立ち返り、自己の生命を若返らせ、活気を取り戻す事を求めた。

フレーベルの教育思想は、ロマン主義の精神が求めた「生の損なわれざる諸根源へと還帰する」道を、子ども時代の生活に求めたのである。

---

<sup>1</sup> 長井和雄 森田孝 市村尚久 小笠原道雄 編『ロマン主義教育再興』東洋館出版社、1986

年、1 頁。

2 シュブランガー著 小笠原道雄 鳥光美緒子訳『フレーベルの思想界より』玉川大学出版部、1983 年。

3 荘司雅子『ヒューマンイズムの教育思想』刀江書院、1968 年、124～125 頁。

4 荘司雅子『フレーベル教育学への旅』日本記録映画研究所、1985 年。

5 フリードリッヒ・ウィルヘルム・シェリング (Schelling, F.W. 1775-1854) は、フィヒテ門下の哲学者。

6 岸信行「フレーベルとドイツ浪漫主義」『中央大学論集』第 2 号、1981 年。

7 倉岡正雄『フレーベル教育思想の研究』風間書房、1999 年。

8 沼田裕之 加藤守通 編著『文化史としての教育思想史』福村出版、2000 年、153 頁。

9 長尾十三三『西洋教育史』東京大学出版会、1978 年、153 頁。

10 ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ (Fichte, J.G. 1762-1814) は、カント研究から名を馳せた哲学者。

11 フィヒテ 永雄策郎訳『獨逸國民に告ぐ』法政大学出版局、1953 年、10 頁。(引用の旧字体仮名遣いを改めました。)

12 沼田裕之 加藤守通 編著、前掲書、154 頁。

13 宗教的な価値や権威(キリスト教的原罪 etc...)に対する批判の姿勢 理性の力への絶対的信頼。(この世界の事象はすべて人間の理性の力によって把握することが可能である。) 普遍主義の 3 つの特徴を持つ思想で、ヴォルテールやライプニッツが代表者として上げられる。

14 同上、1986 年、27 頁。

15 同上、1986 年、23 頁。

16 長井和雄 森田孝 市村尚久 小笠原道雄 編『ロマン主義教育再興』東洋館出版社、1986 年、109 頁。

17 荘司雅子『フレーベル研究』玉川大学出版部、1984 年、362 頁。

18 荘司の「ロマン主義」の構図は、「シュトゥルム・ウント・ドランク」の思惟を継承するにあたって「古典主義」と対立し、「啓蒙主義」の影響も受けていたというものである。「シュトゥルム・ウント・ドランク」は、成瀬無極によって「疾風怒濤」という和訳がされたが、この名前の由来は、ドイツの詩人クリンガー (1752-1831) の戯曲の名前にある。「シュトゥルム・ウント・ドランク」の代表者として「北方の賢者」の異名をとるハーマン (1730-1788) とヘルダー (1744-1803) が挙げられる。「シュトゥルム・ウント・ドランク」は、啓蒙・主知主義が理性に信頼を置くのに対して、感情を重視し、荘司によれば「一切の理性の支配を軽侮することをもってむしろその誇りにした」のであった。

19 7 歳から 18 歳までの子どもを預かって教育していた。

20 荘司雅子『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版部、1975 年、76 頁。

21 荘司雅子『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版部、1975 年、49 頁。

22 荘司雅子 前掲書、玉川大学出版部、1984 年、91 頁。

23 ローレンツ・オーケン (Oken, L. 1779-1851) は、シェリング門下の自然哲学者。

24 荘司雅子 前掲書、玉川大学出版部、1984 年、90-91 頁

25 荘司によれば、オーケンは『自然哲学』の序論において「宇宙は一個の球体であり、この宇宙において統一体である全てのものもまた球体である。」などという見解を書き記している。

26 荘司雅子 前掲書、1984 年、31-32 頁。

27 カール・クリスチャン・フリードリッヒ・クラウゼ (Klaue, K.C.F. 1781-1832) は、フィヒテとシェリングに学んだ哲学者。

28 荘司雅子 前掲書、1984 年、90 頁。

29 荘司雅子、前掲書、玉川大学出版部、1984 年、9-10 頁。

30 莊司雅子、前掲書、1984 年、361 頁。

31 フレーベル曰く「私の精神の最内部に隠された動向と感情と直観とを私に明らかに且つ生き生きと知らせてくれた。私の精神と心情との最内部の憧憬と努力とは私の面前に明らかにされた。この書物を手放せば、私は自分自身を手放すように思った。」(長田新 訳『フレーベル自伝』岩波書店、1949 年、64-65 頁。)

32 岸信行「フレーベルとドイツ浪漫主義」『中央大学論集』第 2 号、1981 年。

33 ノヴァーリス作 笹沢美明 訳『夜の賛歌』岩波文庫、1959 年、40 頁。

34 由良君美 編『ノヴァーリス全集 第 2 巻』、牧神社、1976 年、27 頁。

35 同上、26 頁。